

SHARP

シャープ社友会

栃木支部

1999/5

総会号 (第3号)

日光

栃木

発行責任者
浦川正司



タイトル： 紺碧の空に、燦々と輝く日の光、緑豊かな大地。自然に恵まれた栃木をシンボルします。と、同時に当地を代表する観光名所“日光”を顕わします。

カラーコンセプト： 日光の赤 (R)、栃木の緑 (G)、バックの青 (B) は、カラーテレビの信号の、R・G・Bをイメージし、AVシステム事業本部のルーツを象徴します。同時に、グリーンは社友会のシンボルカラーでもあります。

第二の出版

支部長 浦川 正司

早いもので、もう定例総会を迎え、新しい年度が始まります。

昨年は支部創設十周年と輝かしい祝福の総会を皆さんと共に喜びました。更に永年の夢でありました栃木独自の社友会、会報「日光」も、編集者と会員皆様のご協力で創刊号を発行し節目を飾ることが出来ました。

今年は更に一段と過去の実績を踏み台にし飛躍したいと思われ、あれやこれやと模索しています。会員数も百三十名と増加の一途です、会員の増加に負けない様に社友会活動の充実を願っています。今年に評価される活動実績が生まれません。でも、今年是一年目の節目の年であり、全員が知恵を出し合い栃木としての特色ある活動を実現したいものです。それには全員参加が一番です。会員の一人一人が、何にか一ツ自分に適応したクラブ活動に参加し、皆さんが企画・立案・実行と三位一体となった活動をお願いします。私達も第二の人生をタダのんびりと一日一日を過ごすだけでは無味乾燥と思います。何か自分の趣味を生かし、友達と談笑し生きていく喜びを家族共々分かち合い、明日への活力として頑張りたいと思います。節目に当たり今年、各クラブを再度見直し活動再開を期待したいものです。

夢と生き甲斐のある人生を自らの手でかなえたい。



平成11年の社友会栃木支部賀詞交換会は、1月31日から2月1日西那須野町乃木温泉ホテルで行われた。

出席会員39名、来賓として会社・労組よりご出席いただき、1月31日午後6時より一同記念撮影の後、支部長の挨拶に続き、会社・島田総務部長殿が社業の近況等を、労組・池澤執行委員長殿より社友会のまとまりの良さを労組活動に取り入れたい等、のご挨拶を頂いた。

浦川支部長は、昨年末で会員が121名となり、本年は12名増加の見込みであることより会員相互の益々の健康とコミュニケーションを図る場を、行事・クラブ活動等を通じて図りたいこと、支部機関紙「日光」第3号を5月総会に発行予定しているの、原稿執筆へのお願いをしたいこと等の挨拶があった。

増田新会員の乾杯の音頭により宴会に移り、会員相互の健康を祝し、近況交換等賑やかに、午後8時30分中締めとなった。
(仲谷輝郎 記)

富山きとぎと一人暮らし

(註)「きとぎと」は富山方言で「生き生き」「ピチピチ」の意



藤井 恭平

昨年二月に、「定年駅」を通過し、縁あって越中富山に単身赴任しております。周りからは「エエ年して、アホやなあー」とか「授業料を払ってでも何かをしなればいけない」とか、色々なご意見を頂戴しました。

退職後に渡される長い「自由時間」と言う切符、「さて、どう使えば一番自分らしいか」、「一体、何ができるだろうか」。しばらくは、様々な思いが胸中に去来しておりました。

「よし、思い切つて、富山に行つてみるか!」。いざ来てみると、「余程夫婦仲が悪いのでは・・・」、「挑戦するのは、気持ち若くて良い事だ」と、これまた反応は様々でありました。

振り返つてみますと、シャープ在職中に約一年間、スペイン・バルセロナに赴任した事が、少し影響しているように思われます。地中海性気候のバルセロナは、一年を通して気候は温暖で、街を歩けば芸術的雰囲気は溢れておりました。又、風光明媚な所であり、人種偏見も少なく、ある意味では居心地の良い土地柄でしたが、何と云うても矢板から Door to Door で二十四時間も離れていきますし、私にとつては、異文化、特に

言葉や食事(オリーブ油、ニンニク、トマトがベース(註)日本のみそ、しょう油に相当する)が仲々大変でありました。

この事に比べれば、日本の中であれば、端から端まで行つたところで知れております。言葉は通じるし、文字は読めるし、日本食はあるし、テレビはどのチャンネルも日本語放送です。当たり前。元氣な内に、大阪、矢板以外の土地を経験するのも悪くない、と思つた次第です。(住むのと、旅行するのでは、違いますからね)

冬の日本海側はどんよりとした日が多く、一月、二月は雪もよく降りました。しかし気温は、矢板より高めです。天気予報の富山は、大低が雪だるまマーク、関東地方の晴れマークを見るにつけ羨ましくもありました。降り出すと数センチ、数十センチと、またたく間に雪が積もる有様は新しい驚きでした。しかし墨絵を思わせる雪景色は風情があり、仲々のものです。時たまの晴天には、立山連峰が真近に迫り、特に富山湾越しに見える冬の立山連峰の勇姿は、息をのむ程の絶景です。富山は、水、米、酒、魚、野菜とうまい食材が揃っています。昨今は、

自炊のペースもマスターしました。ポイントは「朝」にあります。「段取り七分に、腕三分」の如く、一週間、一日の計画のもとに、買物を済ませ、その日の分の下ごしらえを、出勤前に済ませておくと、勤めから帰ってからでも、短時間で自分好みの実によく美味しい夕食を作ることが出来ます。次元は異つても、団体個人も、目標、計画、段取りが如何に大切か、改めて痛感しております。

月に一度、矢板へ帰るのも楽しみの一つですが、休日も同様に計画を立て、ポイントを絞つて、日本海側の自然を散策するのが楽しみなこの頃です。

立春を過ぎたとは言え、未だ冬景色の富山を拠点に、元氣に頑張っております。

この会報が発行される頃には、富山にも春が訪れていることでしょう。たとえ、身体は少しづつ衰えようとも、氣力だけは、今までのまま持ち続け、常に「ヤング・シルバー」でいたいと願っております。

機会がありましたら、どうぞ富山に
来られ。

(註)「来て下さい」の富山方言です。

水道山の友

市内上戸祭町の水道山（宇都宮の給水基地で標高百六十九・六メートル、大正五年三月給水開始）に百四十段を数えるレンガ造りの立派な階段がある。勾配もかなりきついが十段区切りで踊り場が設けてあり、中・高校生等がこの階段を上り下りして鍛練の場利用している。私の家から約八百メートル。距離も近く見晴らしも良いので、散歩に出掛けた折には、ときどきこの階段を上る事になっている。

立春も過ぎたといってもまだまだ寒いですが、二月半ばの天気の良い昼前、散歩がたがた足の運動を兼ねて、約三千歩ほど歩いてから水道山へ行った。上り口に着いた時には、多少汗ばんでいたが息を切らしながら一気に百四十段を昇り切った。頂上の広場には、私より先に上つていた同年輩のメガネをかけた男が肌着一枚になつて汗を拭いていた。

私は「今日は」と、挨拶をするのが精一杯で、ハア・ハアしながら両手を拡げて深呼吸を二十数回、やっと息を整えた時には全身汗びっしょり、額からも汗の玉が流れ落ちて来た。トレーニングシャツを脱ぎ、さらにその下にきていた丸首のセーターも脱いで肌着一枚になり汗を拭き始めた。

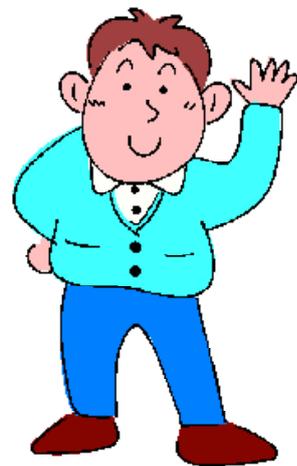
私の呼吸が整うのを待っていたかのように彼が「お宅さんお元気ですね、途中で一度も休みませんでしたね。たいていの人は途中で一〜二度休むんですよ。」私「そうですね、ときどき来るんですが精一杯の頑張りですよ。百段あたりが最もきついですね」と答えた。

彼「そうですね、私はここえ来ると上りを五回繰り返して帰るんです。」私「そうですね、それじゃ一回や二回はらくらくですね。」

彼「いやいや、そんなことはありません。一回目も五回目も途中で息が切れるのは同じなんです」という話だった。私は少々不思議に思ったが、とてもじゃないが、体験してみる気になれないので、若いときと違い、老人は訓練しても強くなれないのかと思ひシヨックだった。さらに彼は「雨の日は東武やロビンソンなど、デパートの階段を昇りに行くんですが、屋内は何となく息苦しい気がしますよ、ここが一番気分がよいですね。」失礼ですがおいくつですか？」

私は彼がいくつに見てくれているのかと思ひ「十三年生まれです」とこたえた。彼「そうですね、それじゃ私より二つ上ですね。私は十五年生まれです」といった。私は、俺の顔はやっぱり年令相応なんだなと思ひ多少ガツカリした。

土田 甲子



彼「兵隊には行ってきたんでしよう。」私「終戦の年の九月一日に入隊の予定でしたが十五日の違いで入隊しませんでした。軍隊には縁がなかったんですね。」

彼「それは良かったですね、私は六か月体験しましたが、好んで行くところじゃないですよ。私はこの近くで生まれたんですよ。その当時は兵隊さんが、この階段でシゴかれているのをよくみかけました。バテると後ろから蹴飛ばされてしまったからね。可愛想だなあと思っていました。中学時代には軍事教練の時間がありましてねえ、全くバカな戦争をしたもんですよ。」

私「そうですね、国民はまったくメクラにされ外国の情報から隔離されていましたからね。軍部の独裁を許した政界・官界のリーダー達の責任ですよ。」

などなど話しはずんだ。 ↙



小一時間彼と昔話しをして、階段を降りてきたが途中で、彼がイヤホンに差し込んだ。
私「クラシックですか」。
彼「いや、ラジオです。いろんな情報が入りますからね」。
私「そうですか、水道山にきたウォークマンが、ウォークマンを聞いているんですな、ハッハッハア……」とジョークを飛ばしたら
彼「そんなんです」と笑いながら「お宅もウォークマンを聞きながら歩いているんですか」。
私「手ぶらですけど、シャープに勤めていた頃ウォークマンが出まして一世を風靡しましたからね」。
彼「ああシャープにいたんですか、液晶のシャープですね、うちの子供が日立にいるんですよ、それで知っているんです」。
私「そうですか、今後とも宜しくお願ひします。またお逢ひしましょう」。
と言った別れた。非常にさわやかなお昼前のいつときだった。
その後彼と、ときどきお逢ひして雑談を交わしている。

私のボランテニア考

鈴木常

私のボランテニアの考えからお話しをさせて戴きます。

ボランテニアとは人の為に、何かをしようと言う考えではなく、自分の為に人に対して何が出来るかと言うことが原点になっております。私は会社に居た時に趣味としてやっていた空手道を通じて人間関係の大切さと人と人との繋がりの大仕事な事を思い会社退職を機に私なりのボランテニアの一貫として社会に役立つ事を自分も含めてやって見ようと思ひ、現在西原小学校の体育館をお借りして子供達と一般の方も含めて二十名近い人と空手道を楽しみながら人間関係を広げようと頑張っている次第です。

空手道については子供達には水泳と同じく、自分が溺れるような事が有った場合には水泳をやつていれば助かる。又空手道をやつておれば何か自分の身に事がある時には助かると言うように教えております。それは私なりのボランテニアの一貫であり人とお互いに助け合つて生きて居るのであると言う証しでも有ります。お互いに同じ道を歩む事で体を通して教えたたり、教わつたりして信頼をしい通じ合う物であると思ひます、

したがって色々なボランテニアの形は有ると思ひますが、私なりに人間関係を大事にしてお互いの思いやりの大切さを子供達やその他の人達にも植え付けて行くやり方も一種のボランテニアだと思ひております。趣味を通じてのボランテニア活動で有りますので無理をせざるに自然に出来ると思ひ致しております。

ボランテニアとはお互いに助け合い、教え合う事が根本の考え方で有ると思ひます、社友会を通じてペンを取らせて頂き本当に有り難う御座います。今後ともよろしくお願ひ致します。

私としては六十を過ぎて自分なりに社会的ボランテニアとして参画出来る事を感謝致しておる次第です。

「我が趣味を生かして行けるボランテニア」



「栃木県とシャープと私」

二五〇 春山 文夫

◇栃本なまりの郷愁

東京生まれの「宇都宮っ子」だった私にとつて、栃木県は、少年時代の思い出を一杯残していてくれるところである。栃本なまりにハツとして、先ずは、土地勘みたいなものを取り戻すのである。栃木工場の建設間もない頃、矢板駅近くのうどん屋さんで、

「シャープがデックケー工場こしらえて」と、小耳に挟んだ。けだし、江戸っ子は「デックケー」という。それが栃木県へくると、「デックケー」と語尾が変化するらしい。コンベヤーのすぐそばに集まる朝礼に参加した。

「ニエシンスン、セイエとソウエ」同行の浪速っ子たちは、これが「二意専心、誠意と創意」を意味すると知るには、社是の唱和が終わるまでの、数十秒のタイムリングのずれがあるらしい。これが私には即刻わかるのである。東北弁の影響で、「イ」と「エ」、「ス」と「シ」、「チ」と「ツ」の区別がつかないのだと思う。

その昔流行った「愛国行進曲」を東北出身の兵隊さんが歌うと、

「天地の正気、ハチラチ（澁刺）と…」と聞こえたのを子供心に覚えている。

栃木県は特に「イ」と「エ」のなまりがきついなという。習字の時間でも、先生は、「オミヤニトリエ」と出題する。「オミヤニトリイです！」と私は言う。「オミヤニトリキ」と先生が板書してやつと一件落着した。

◇宇都宮砲兵連隊のこと

私が幼稚園の頃、父は東京の兵器本廠から宇都宮の砲兵連隊に赴任した。桜並木の素晴らしい軍道沿いに連隊があった。父は毎日、四条町の家から馬に乗って出勤した。正月ともなると、玄関は将校の長靴で一杯、お客様の靴を揃えるのが子供達の役目であった。宴会がはじまると、父の膝に座って得意になって軍歌の音頭取りをする。

「ここは御国を何百里」とか「砲兵歌」とか。

カラオケで軍歌が出るのは、この郷愁が習性となったのだらうか。火砲祭といって、連隊を公開する年一回の催しがあった。その日は家族も招待される。正門の、兵隊さんの敬礼姿の大きな看板

今回社友会本部より投稿戴きました。古い方はよく存じ上げて居ると思いますが、春山氏は生産技術関係で活躍された方です。栃木会報「日光」を見られて懐かしく、少年時代を過ごされた栃木の思い出を寄せられました。当支部会報も広く社友会に浸透し皆さんに愛読されて居ます。今後他他の支部より投稿が参りましたら順次掲載して行きたいと思えます。
(浦川 正司 記)

に迎えられ、会場の舞台には出し物が次々と出る。

「私のラバさん、曾長の娘、色は黒いが南洋じゃ美人」腰蓑をつけ、口紅のほかは体中を墨で塗りつぶした兵隊さんの行列が会場を一回りする。踊って、歌って、舞台へ上がる。隊長の父を見逃すはずがない。たちまち舞台へ押し上げられ、中に入って一緒になって踊る。ヤンヤの喝来でフィナーレ…この日一番の出し物と評判が高かった。支那事変前の、平時の軍隊のひとつときではある。

◇宇都宮幼稚園と尋常小学西校

さて私は、銀杏の大木のある宇都宮幼稚園に通った。盛り場のパンバ町を通り抜け、下り坂を曲がったところにあつたように思う。

「蝶々、ちようちよ、葉の葉に止まれ…」「あれ飛行機が飛んできた。あんなに速く飛んでいる。モウアレあそこに飛んでいる。ハーヤク見ないとおくれませう」先生のオルガンに合わせる。トンデイルの時に、両手を広げ、後ろ足を水平にして尾翼を形どるのが難しく何遍もやつた。妙に、この歌とお遊戯を思い出す。

卒園式の日は大雪であった。母と一緒に人力車で行って、園長先生からたしなめられたことがある。
 間もなく、宇都宮尋常小学西校に入学である。駅前のデパートで、ランドセル・学帽・学生服・編上靴と取り揃えて貰った。当時は、かすりの着物に兵児帯で下駄ばきという友達もいたから、モダンな小学生だったのである。西校の校章は、「宮」の字を白抜きした黄色いマーク！西校は今でも名門のよしである。

唱歌の時間は、大きな声で元気よく歌えば「甲」を貰えた。その頃は数少ない幼稚園組がリードしていた。

「ほかの歌を知っている人？」の問いかけで挙手登壇、

「花は霧島、タバコは国分！」

とやったら、とたんに先生からマツタが掛かった。何の意味かわからないでいたが、数日後の担任の家庭訪問で、

「酒席の唄を歌う、勇敢な子がいましたナ」

と話題になって、先生は帰られたという。その日、私の下校を待ち兼ねるようにして祖母と母、

「元気のいい子がいるってネ、誰だったの」「うん、それはボク！」で大爆笑！父が帰宅してまたも大笑い。思い出しては祖母と母、一日中笑い転げるといふ一幕もあった。天真爛漫な少年であった。

二荒神社には、小学生の絵や習字が奉納されていた。神社参拝を日課にしていた祖母が、私の作品を見つけてたいへん喜んでくれた。子供の目に見る二荒神社は、あんなに高い階段と広い境内だったのに、いま、訪れてみるとウソみたいに小さい。

(次号に続く……)

- ◇ 大寛町の家
- ◇ 栃木工場建設の頃
- ◇ 那須野原の景観
- ◇ 定年後のシャープ訪問



『天ぷら定食』 富岡堯子

うちの工場にもテレックスの機械が置かれる事になり、本社からジャンパーワイヤがどうのこうの、という電話があつてジャンパースカートしか知らない私は困った。しかし無事に設備が整って、一日の終わりに、海外営業の私とE子が、オペレーターを努める事になった。あまりにも日本語の基準から外れた原稿が多いので、私はイヤになり、片っ端から添削して模範文を流してやった。

それはある夏の日だったと覚えている。

残業の出来ない日で、組合の巡回があるというので、相棒の国内営業も、経理も総務もアットいままにいなくなり、薄紫の夕闇が迫る頃、息せき切って技術の某係長登場。

「何よ今頃！」などと二人は言わず、「何かいい事あるわよね」と、にこやかに引き受けた。打ち終わり、帰ろうとしてふと見ると、傍らの机に『千円札』が一枚。「返さなくては」と私。「うちの会社、係長になると給料いいですから」とE子。年は上でも精神年齢の低い私は後輩に従った。

二人は町に出て、『天ぷら羹』で、いつも来客に取る五百円の『天ぷら定食』をめいめい食べて満足。——あの頃、会社は楽しかった。五百円は三十年前の貨幣価値であり、会社の名は、関東では誰も知らない『早川電機』というのだった。

我が人生

一九九〇年 平成二年十月二日この日は満六十歳定年退職を迎えました。ここに永き四十三年余の歩みを振り返り、当時の記憶を追いながら感無量の思いのまま筆を走らす事にします。

私は一九四七年（昭和二十二年）三月九日、当時の早川電機工業株式会社田辺工場へ入社した。職場名は第五製造課、従業員は約三十名程度でマグネチックスピーカーを製造する職場、最初はワッシャーにビスを通し板盤に並べる単純な準備作業を毎日やった。職場の雰囲気は家庭的で明るく、みなさんとても面倒見がよく親切で気持ちの良い職場であった。私は十六歳坊主頭で服装は国民服にサンダル履き、同僚からはヨッチャンく、と呼ばれ楽しく働いた。課長は保田さん（通称ヤッサン）親しみ易く親父みたいな優しい課長さんだった。その頃日本はまだアメリカの占領下であつて戦後の貧困の中、再建日本をめざし全国民が立ち上がるうとしていた時であつた。



スピーカーの製造ライン。
(1954年/昭和29年)

当時の流行歌と言えば憧れのハワイ航路・夜霧のブルース・東京ブギウギかへり船などが大流行した。映画も凄く人気で戦後の日本を明るくしていた。しかし食糧不足で天皇陛下が食糧危機突破に関して日本国民に対し激励のラジオ放送をなされた事もあった。戦時中と同じ芋や、とうもろこし、小麦粉、団子等闇市での立ち食いなど栄養失調で死亡する人々も多く飢えの時代でもあった。生活必需品はすべて配給制、タバコは朝早く店先で並ばないと手に入らず、とうもろこしの髭、松の枯葉などを手巻きにし六ツ切りにし敗戦パイプ（当時流行）で吸っていた。会社でも週一回加配米と言つて一人三合五酌の米が支給され、大事に持ち帰りご飯ならぬおかゆを楽しんだものだ。会社では買出し休暇があり、洋服、着物など持つて米を求めに農家へ行く、つまりタケノコ生活、買出し部隊で列車は鈴なりの超満員、取締まりも厳しく命がけの買出しであつた。

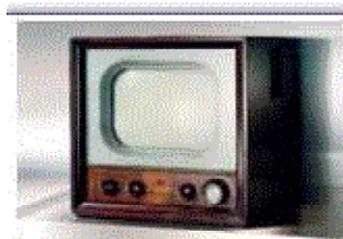


中村 義雄

ある日高島屋百貨店でテレビジョンの博覧会があつた。未来にこんなものが出来ると夢のテレビ公開が催され、会場の外を走る市電、バス、人の波等を中継放送されたのを黒山の人々の間から見物したのを思い出す。

当時早川電機の主体は本社、田辺工場、平野工場、和泉工場等で戦時中は軍需工場として無線機、鉱石ラジオ等生産、私が入社した頃にはラジオ生産が主であつた。入社二年後の昭和二十四年後半頃から不況の波が早川電機に押し寄せて来た。給料も遅配々々の連続でとうとう分割支給となり苦しい日々が半年以上も続いた。会社から希望退職の募集提案が示され私も随分悩まされた。

退職金代わりに国民型ラジオ一台（五年以上勤続者には二台）の支給で募集が始まり次々と友達が退職していった。計二百六十名程が早川電機を去った。私は幸い兄や姉達に守られ辞めずに居残る事にし、会社再建に意欲を燃やす事にした、給料遅配は八ヶ月も続いた。



電機業界もなんとなく見通しが明るくなってきた、それは民間放送の開始である。一度に四局の放送局が誕生、ラジオ黄金時代がやって来た、早川電機も次から次へと提供番組を世の中に送り出し、ラジオも次々と新製品を創り出しマジック・アイのヒット商品を発売大変な人気商品となった。我々のスピーカーもマグネチックからダイナミック型に改良され、音質で勝負したのもその頃でした、一台のラジオに高音・低音と二個もスピーカーが付くスピーカーラジオに人気が集まった、民放ブームに市場が沸き需要も増大ラジオ聴取者は千万人を越えた。

当初手押し式ラインも検討、改良等によりベルトコンベアー自動式へと移り変わり増産々々の毎日が続く、希望退職者の職場復帰もあつて第五製造課は大きく成長していった。

我が国初めてのテレビ受像機の試作に成功(昭和二十六年)その後スピーカーも東洋電機へ全面移管される時がやって来た、スピーカーだけでなく

テレビの各種部品完成品はすべて外注生産となった。私はスピーカー無き後テレビ第一工務課へ移りキャビネットを担当する事になり、平野工場や発注先のナニワ工機などへよく飛び廻った、発注・受入・管理等を受持った。一九五五年(昭和三十年)一月シャープテレビが颯爽とデビューした。当時の価格十四型で十七万五千円、販売店、デパートの店頭は黒山の人だかりで当時人気絶頂の力道山のプロレス中継に人々は熱狂していた。「目で見るラジオ」と驚喜の声が上がり、シャープテレビの名は新しい映像生活へと全国に広がっていった。

一九五五年(昭和三十年)代には夢の家電電化商品が一気に花を開いた、八尾工場が建設電化製品の専門工場となり、皇太子のご成婚でテレビが飛ぶように売れた、一早くカラーテレビに着手(昭和三十五年)この年には奈良郡山工場が誕生シャープ電卓の生産メッカとして世界に名を知らせた。翌年(昭和三十六年)には我が国初めての電子レンジ量産開始、広島工場に続き栃木工場の誕生、海外にも生産工場を建設アメリカテネシー州メンフィス(SMCA)早々とカラーテレビ・電子レンジの生産開始、一九六九年(昭和四十六年)十一月早川電機からシャープ株式会社へ社名変更となり、エレクトロニクスメーカーへと大きな転換を遂げた。

早川会長、佐伯社長の新体制となる。私はその後工務課から部品管理部門へ移り副資材を担当そのまま一九七三年(昭和四十八年)栃木工場へ家族と共に転勤する。間もなくビデオの生産が始まった最高月産三十二万台生産したあの頃が懐かしいです。

一九八〇年(昭和五十五年)本社でシャープ社友会が設立 会員七十四名でスタートした。私の在籍中に栃木支部も誕生した、一九八一年(昭和五十六年)には奈良新庄町にソーラー専門工場が完成、年号が変わり平成元年には百インチの液晶ビジョンが登場した。「液晶のシャープ」の名を不動にした年でもあつた。その後コードレス留守番電話が業界トップ空前の大ヒット商品となり、売上げ一兆円に達した年でもあつた。入社以来四十三年余を振り返り思い出しましたが益々大きく伸ばす我がシャープの雄姿は私共余生を過ごす者の誇りであります。



奥の細道殺人事件

縁起でもないかさね橋縁起

松尾芭蕉が奥の細道の旅に出た一六八九年（元禄二年）は西行没後五百年の年である。

「奥の細道」は日本文学史上燦然と輝く作品であり、注釈書も非常に多い。「曾良随行日記」には、芭蕉と同行曾良は玉生から、鷹内、矢板、沢、大田原を経て黒羽に行ったことが記されている。途中矢板あたりで馬を借りその馬の後を「小さき者ふたり」が慕ってついてきた。独りは「かさね」という六歳ぐらゐの女の子であった。借りた馬は用が済むとお金を鞍つぽに結付け乗り捨てたのである。馬は帰り道を知っていて独力で帰って行く。つまり借りた馬に馬子などはついてこないのだ。平成五年ごろこの故事に因んで矢板市の箒川に架けられた橋が

「かさね橋」と名付けられ、欄干の橋詰には与謝蕪村（よしのぶそん）の「奥の細道屏風」の「小さき者ふたり」が馬の後を慕ってついてきた部分の絵のレリーフがはめられている。芭蕉は、奥の細道のアイドルであり矢板のアイドルでもある「かさねちゃん」が気に入っていて、奥の細道紀行の翌年名付け親を頼まれ「かさね」と名付けた事を伝える芭蕉の真跡懐紙が残っている。

一七七八年（安永七年）八月に簗笠庵梨一（きりゆうあんいち）の「奥の細道菅菰抄（おくのほそみちすがこもしょう）」が刊行されました。この本は「奥の細道」の注釈書として有名なもので、文庫本になっていて今では誰でも人手できます。ところがここにわれらのアイドル「かさね」がなんと殺されたところではないか。芭蕉が聞けばどれ程驚くことか、曾良が聞けば大いに悲じむに違いない注釈である。成人したかさねが結婚した夫に殺されたのである。



上野敦

菅菰抄には「鬼怒川の与右衛門が妻、かさねと云いしは、或いはこの子姫の成長したる後か。大概時代相応にして鬼怒川もまたこのあたり近し」とある。最近の奥の細道の注釈書にもこのことが肯定的に書かれている。この鬼怒川の与右衛門が妻かさねとは歌舞伎、浄瑠璃、清元などに脚色された怪談の主人公かさねのことである。早い話がかさねはお化けになった、幽霊になったのである。菅菰抄刊行の四十七年前一七三二年享保（きょうほう）十六年七月江戸の市村座で、この事件をもとに「大角力藤戸源氏（おおすもうふじとげんじ）」という題で芝居が脚色上演され大評判となった。菅菰抄（すがこもしょう）が刊行された同じ年初演の「伊達競阿国戯場（だてくらべおくにかぎ）」は伊達騒動と累（かさね）の怨霊談を組合わせた作品で、好評で翌八年浄瑠璃でも上演され、ほかに「法懸松成田利剣（けさけまつなりたのりけん）」や浄瑠璃では「薫樹累物語（めいぼくかさねものかたり）」が、一八一三年文化十年四世鶴屋南北の「累淵扱其後（かさねぶさてもそのち）」などがつぎつぎと上演された。しかし何時からか衰退し復活公演もあつたが、明治三十九年から大正にかけて、藤間政弥、六世尾上梅幸、の世尾上菊五郎らが舞踊劇として成功させ、現在では劇場のみでなく、舞踊界でも演じられている。現在のものは、一八二三年（文政六年）六月江戸森田座で初演の、四世南北の清元舞踊「色彩間苺豆（いろもようちよとかりまめ）」が源である。さてもととの事件のノンフィクションの「死霊解脱物語（しりょうげだつものがたり）」が享保十六年市村座での「大角力藤戸源氏」の公演の時の観客に毎日抽選で三部づつ配られたという。この「死霊解脱物語」は元禄三年刊で、殺人事件は一六七二年寛文十二年に起きたものとする。奥の細道紀行の十七年前に起こったもので、二人のかさねは別人だったことがわかったのである。

新入会員の紹介

- ① 会員番号
- ② 氏名
- ③ 生年月日
- ④ 住所
- ⑤ 電話番号

《メッセージ》



① 1347
② 住吉幸人
③ 昭和14. 1. 2

一九九九年一月二日で定年退職により、社友会に入会させて頂きました。今後とも宜敷御願いたします。

私は第二の人生を迎えるにあたっては、ゴルフ関係を勉強しボランティアとしてワンポイントレッスンを練習場にて実施する予定です。

もし練習場で見かけたら声をお掛け下さい。ゴルフを通じて、交友の輪を広げたいと思います。



① 1359
② 増田善一
③ 昭和14. 1. 26

この一月二十六日、定年退職し、即社友会へ入会させて頂きました。

元来私は遊び方が得意でゴルフ、釣り（へらブナ）麻雀、ドライブ、旅行と頑張りたいと思いますので、いつでも気軽に声を掛けて下さい、今後ともよろしく。



① 1369
② 福本英之
③ 昭和14. 2. 8

二月八日、定年退職により社友会に入会させて頂きました、宜敷御願致します。

今後は諸先輩の皆様にお会い出来る事を楽しみに健康第一で毎日を過ごしたいと願っております。



① 1370
② 丸山義人
③ 昭和14. 2. 14

皆様のご指導ご支援により定年退職することが出来ました。心からお礼申し上げます。

素信探求 今までに出来なかったことをこれからのライフワークにじっくり楽しみたいと考えています。今後とも宜敷御願いたします。



① 1371
② 清海他来雄
③ 昭和14. 2. 20

昭和四十三年四月栃木工場を開設と共に赴任して、この二月二十日で定年を迎え社友会に入会させて頂きました。在職中は生産、資材、商品管理業務に従事、無事勤め上げ出来ましたのも諸先輩を始め皆様方のご指導、ご鞭撻の賜と深く感謝致しております。

第二の人生は諸先輩のお教えを賜り、今迄出来なかったことを楽しみながらやっていこうと思っております。

何卒今後共、宜敷御願いたします。

二月二十六日で定年退職し、社友会に入りました小澤です。今後とも宜敷御願いたします。趣味は各地の温泉巡りです



① 1381
② 小澤 宏
③ 昭和14. 2.26



二月に定年退職した白坂です、宜敷御願いたします。私は昭和四十三年、栃木工場展開と同時に赴任し、テレビ、ビデオ・カメラの量産開始に技術部で過し種々のテーマと対面し過せてこれたことの喜びと感謝で一杯です。私の好きな言葉に『青年は建設なり、人生とは闘いの異名なり』と有りますが、これを忘れずチャレンジしていきたいと思えます。



① 1380
② 白坂晃士
③ 昭和14. 2.20

矢板に来て十八年になりました。会社も生活も環境が激変し想いもひとしおです。これからは、仕事を離れて皆様と忌憚なくお付き合いさせて頂けるものと楽しみにして居ります。どうぞ宜敷御願いたします。



① 1396
② 大岩 努
③ 昭和14. 4. 7



此の度、四十年の勤務を終えて社友会に入会させて頂きました。どうぞ宜敷御願い申し上げます。趣味(詩吟、将棋、庭園鑑賞、スポーツ観戦、等)を生かしてこれからの人生を思い切り楽しみたいと考えています。先輩諸兄のご指導を戴きますよう御願い致します。



① 1388
② 藏橋敬二
③ 昭和14. 3.20

栃木支部 物故会員

[ご冥福をお祈り申し上げます。]

会員番号	氏名	逝去年月日	享年
326	国井 豊邦	平成11年2月1日	73歳

編集後記

★会報第3号を総会号として、総会開催日にお配り致します。今後定期的に新春号(二月発行)、総会号(五月発行)と年二回の定期刊行を原則として、如何かと検討しておりますが、会員皆様方のご意見をお寄せ下さい。

★さて3号ですが、経費削減等の時節柄、ページ数の削減等、種々問題はありますが、中身でカバーすべく、より楽しく、より読みやすく努力し、寄稿頂いた原稿の中身が大変充実してました事に助けられて、ほぼ皆様のご満足が得られるのではないかと思っています。

★編集たけなわの四月一日、T.V.が開局し、放送を開始しました。地方色豊かで、不慣れによる荒削りの処もあり、動くホームページと云う感じが、かえって斬新で、会報の創刊号を思い起こして、親しみを感じました。『ガンバレT.V.』というところで。会報も、逐次、洗練に努力致しますので、ご指導、ご鞭撻、並びに多数の寄稿を頂く様お願いいたします。

(編集子一同)